

観光都市函館における住民のシビックプライドの質的研究 A Qualitative Study of Civic Pride among Residents of the Tourist City of Hakodate

前田 ことみ[†], 平野 智紀[‡]
Kotomi Maeda, Tomoki Hirano

[†] 東京都立大学, [‡] 公立はこだて未来大学
Tokyo Metropolitan University, Future University Hakodate
Kotomi-maeda@ed.tmu.ac.jp

概要

観光都市函館における住民のシビックプライド形成を、半構造化インタビューによる質的調査から検討した。西部地区の住民4名への分析の結果、伊藤(2017)の4構成要素に加え〈地域課題への認識〉〈地域の継続・将来性への不安〉が抽出された。観光資源としての評価を超えた身体的・感覚的な場所への愛着を根幹に、地域課題への批判的認識や将来不安が改善志向を伴って地域参画を駆動していた。

キーワード: シビックプライド, 地域愛着, 観光都市, 函館, 質的研究

1. はじめに

近年、持続可能な地域社会の構築において、シビックプライドが重要な役割を果たしている。シビックプライドは、単なる郷土愛にとどまらず、地域をより良くするために自ら行動しようとする当事者意識を中核に据えた概念である(伊藤, 2017)。北(2018)は、音やにおい、風といった感覚を通じて人が街の雰囲気をもとまらに受け取っていることを示している。住民が地域に対して抱く誇りや愛着もまた、こうした日々の生活のなかで積み重なる感覚的な経験を土台としていられる。O'Sullivanら(2023)は、都市住民が過去・現在・未来にわたる具体的な場所経験の蓄積を通じて場所アイデンティティと場所ナラティブを形成し、それが都市開発への能動的関与の基盤となることを示している。すなわち、シビックプライドにおける当事者意識、住民が地域に対して抱く誇りや行動の動機は、日々の生活の中で場所と身体が交わる具体的な経験に根ざした状況依存的な認知として捉えられる。

既存のシビックプライド研究の多くは、伊藤(2017)に代表されるように定量的アプローチによる測定尺度の開発や統計的分析を中心としており、住民がどのような経験や記憶に基づき、いかなる感情を形成しているのかという質的な実態は十分に解明されていない。この課題に対し、本研究は半構造化インタビューによる質的調査を通じて、住民がどのような経験や記憶に

基づき、いかなる感情を形成しているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2.1. 調査対象地と対象者

調査対象地には、函館市西部地区を選定した。函館市は国内屈指の観光都市であり、地域ブランド調査では魅力度1位を獲得する(株式会社ブランド総合研究所, 2024)など外部評価が極めて高い一方、中核市の幸福度ランキングでは低位にとどまる(函館新聞デジタル, 2018)。さらに、西部地区は、観光イメージを象徴する歴史的景観資源が集中する一方で、人口減少や空き家問題といった生活の課題も顕著である。この外部イメージと住民の生活実感の乖離は、観光都市特有の文脈がシビックプライド形成に与える影響を検討する上で適切なフィールドである。同地区は幕末から明治期に外国人居留地として形成され、石畳の坂道、教会群、港湾景観など函館の都市イメージを構成する景観資源が集中する一方、住民の居住空間でもあり、観光を通じて確立される函館らしさのイメージと住民の日常が同一空間で重なり合う。

調査対象者は、地域活動に主体的に関与している住民4名(20代から70代、居住歴や属性は多様)とした。函館市地域交流まちづくりセンター館長の紹介を起点にスノーボールサンプリングで協力者を得た。Aさん(70代男性、同地区に20年以上居住、まちづくりセンターの活動に関与)、Bさん(70代男性、祖父の代から居住、地域活動や観光客への案内に関与)、Cさん(20代男性、函館出身の大学院生、約10年前に同地区へ転居)、Dさん(40代女性、2017年に移住しカフェを経営)である。

2.2. 調査方法

データ収集には半構造化インタビューを用いた。2025 年 7 月から 9 月に実施し、1 回あたり 32 分から 1 時間 1 分であった。「この地域ならではの魅力は何か」「観光客についてどう思うか」「函館に住むことに誇りを感じているか」「観光客が感じる魅力と住民が感じる魅力は同じか」などの質問項目を設定し、語りの流れに応じて適宜追加質問を行った。

2.3. 分析方法

録音した音源を逐語録化し、発話を意味の転換点ごとに切片化した上で、地域とのかかわりや地域に対する認識が表出した発言を抽出し、核心的意味を示す初期コードを付与した。例えば「函館は良いところなのに、うまく活かしきれていないのがもったいない」という発話には、否定ではなく改善志向が含まれる点を踏まえ「地域ポテンシャルへの評価と改善志向」というコードを付与した。

次に、コードを伊藤 (2017) によるシビックプライドの 4 つの構成要素である、地域参画、地域アイデンティティ、忠誠的愛郷心、地域愛着に照らして整理した (表 1)。

表 1 伊藤 (2017) によるシビックプライドの 4 つの構成要素

地域参画	地域社会の一員としての責任を真剣に考えている
	自分のような人間が地域全体で重要な役割を果たすと思う
	地域社会を良い場所にするための自分なりの貢献ができていない*
	自分は地域社会に変化を起こすことができると思う
地域アイデンティティ	人生の大部分が地域に結びついている
	「市の人」という言葉は、自分がどういう人物かをよく説明する言葉である
	「地区の人」という言葉は、自分がどういう人物かをよく説明する言葉である
	「市」市民であることは自分にとって重要なことである
忠誠的愛郷心	この地域は、他のほとんどの地域より良い場所である
	地域を批判している人がいたら、地域を擁護する
	地域で友人と地域の産品や製品を誇らしく勧める
	地域のスポーツチームを積極的に応援する (プロ・アマチュア・学校など)
地域愛着	地域は住みやすいと思う
	地域が好きだ
	地域の雰囲気や土地柄が気に入っている
	地域に私の居場所がない*
	地域にずっと住み続けたい
	地域を大切だと思う
	地域にいつまでも変わってほしくないものがある
	地域なくなってしまうと悲しいものがある
	* : 逆転項目

さらに、既存の枠組みでは捉えきれない語りについては KJ 法 (川喜田, 1967) を用いて新たなカテゴリを導出し、各要素間の影響関係を図式化した。

3. 結果

分析の結果、既存の 4 つの枠組みについて、11 のサブカテゴリが導出された。〈地域参画 (Community Engagement : CE)〉には、地域運営・場づくりへの関与、地域内でのネットワーク形成、観光主体の情報・魅力の発信の 3 群が含まれた。〈地域アイデンティティ (Place Identity : PI)〉には、居住履歴・生活史による自己の位置づけ、景観・歴史と結びついた地域認識に加え、観光地に住む立場から「観光地としての函館／居住地としての函館」の間で揺れる観光と日常の境界感覚の 3 群が含まれた。〈忠誠的愛郷心 (Loyalty-based Local Pride : LP)〉には地域価値への誇り・確信と、他地域との比較・擁護の 2 群が、〈地域愛着 (Place Attachment : PA)〉には自然・景観への愛着、居住経験からくる愛着、外部との比較による愛着の 3 群が整理された。

一方で、これらのいずれにも完全には収まらない語りが一定数確認された。地域の現状への問題意識と「より良くしたい」という改善志向を伴う発話、および地域の将来や継続性への不安を示す語りである。いずれも地域への否定や距離化ではなく、地域への関心や関与を前提とした視点である点に共通性がみられた。そこで本研究では、地域の現状に対する改善志向を捉える〈地域課題への認識 (Recognition of Local Issues : RI)〉と、地域の将来像や継続可能性への不安を捉える〈地域の継続・将来性への不安 (Anxiety about Continuity and Future : AF)〉の 2 カテゴリを新たに設定した。

〈RI〉には、若年層流出など人口・世代構造の課題と、観光混雑やマナー問題といった生活秩序への脅威、オーバーツーリズムへの懸念の 2 群が含まれた。〈AF〉は地域が将来にわたり維持・継承されることへの不安の語りであり、RI の観光課題から AF の不安へと接続される語りが複数確認された。以上により、計 6 カテゴリ・14 サブカテゴリが設定された (表 2)。

表 2 カテゴリとサブカテゴリー一覧

カテゴリ	サブカテゴリー	分類の観点
〈地域参画 (CE)〉	(CE-1) 地域運営・場づくりへの関与	地域の場合や活動を運営・維持する実践の語り
	(CE-2) 地域内でのネットワーク形成	住民や関係者とのつながりを通じて地域への関与の語り
	(CE-3) 観光主体の情報・魅力の発信	観光客対応や情報発信を通じて地域の魅力を伝える語り
〈地域アイデンティティ (PI)〉	(PI-1) 居住履歴・生活史による自己の位置づけ	居住経験を通じて地域を自分の場所として位置づける語り
	(PI-2) 景観・歴史と結びついた地域認識	景観や歴史など具体的要素を通じた地域理解の語り
	(PI-3) 観光と日常の境界感覚	観光地と生活の場のあいだの距離感を意識した語り
〈忠誠的愛郷心 (LP)〉	(LP-1) 地域価値への誇り・確信	地域の価値を誇りをもって語る態度
	(LP-2) 地域比較・擁護	他地域との比較の中で自地域の価値を擁護する語り
〈地域愛着 (PA)〉	(PA-1) 自然・景観への愛着	自然環境や景観への情緒的な好意を示す語り
	(PA-2) 居住経験からくる愛着	日常生活や長期居住の積み重ねによる愛着の語り
	(PA-3) 外部との比較による愛着	他地域との比較を通じて強まる愛着の語り
〈地域課題への認識 (RI)〉	(RI-1) 人口・世代構造の課題	人口減少や世代構成の偏りへの問題意識の語り
	(RI-2) 観光混雑・マナー問題	観光増加による生活上の支障や違和感を示す語り
〈地域の継続・将来性への不安 (AF)〉	(AF) 地域の継続・将来性への不安	地域が将来にわたり維持・継承されることへの不安の語り

〈地域参画 (CE)〉には、地域運営・場づくりへの関与、地域内でのネットワーク形成、観光主体の情報・魅力の発信の 3 群が含まれた。〈地域アイデンティティ (PI)〉には、居住履歴・生活史による自己の位置づけ、景観・歴史と結びついた地域認識に加え、観光地に住む立場から「観光地としての函館／居住地としての函館」の間で揺れる観光と日常の境界感覚が含まれた。〈忠誠的愛郷心 (LP)〉には地域価値への誇り・確信と、他地域との比較・擁護が、〈地域愛着 (PA)〉には自然・景観への愛着、居住経験からくる愛着、外部との比較による愛着が整理された。

新設した〈RI〉には、若年層流出など人口・世代構造の課題と、観光混雑やマナー問題といった生活秩序への脅威、オーバーツーリズムへの懸念が含まれた。〈AF〉は地域が将来にわたり維持・継承されることへの不安の語りであり、RI の観光課題から AF の不安へと接続される語りが複数確認された。

4. 考察

本章では、各話者の語りにおけるカテゴリ間の関係を検討する。分析にあたっては、あるカテゴリが他のカテゴリの前提・背景・理由として語られている場合、および「だから」「好きだからこそ」といった因果的・展開的な語用表現を伴う場合に、カテゴリ間に影響関係があると判断し、矢印を用いたダイアグラムとして図式化した。そのうえで、4 名のダイアグラムを重ね合わせ、複数の話者に共通して確認されたカテゴリ間の関係を中心に統合することで、観光都市函館におけるシビックプライドの概念図 (図 1) としてまとめた。統合にあたり、伊藤 (2017) の 4 つの構成要素はシビック

プライドの枠内に配置した。一方、本研究で新たに見出された〈RI〉〈AF〉については、後述するように参画を促す語りと関与を弱める語りの両方が確認されたことから、シビックプライドの構成要因にも非構成要因にもなり得る要素として、枠外に配置した。以下では、図 1 に示した関係性の特徴を 3 点に整理して述べる。

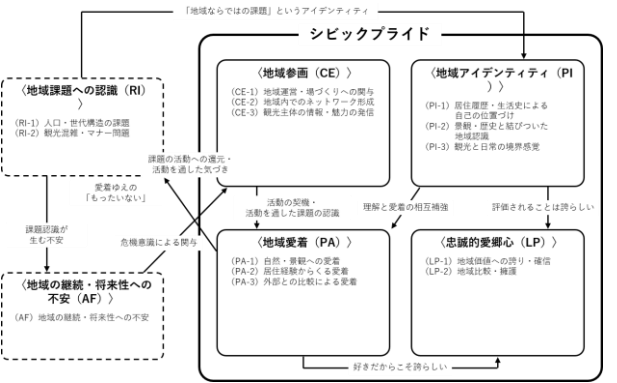


図 1 函館におけるシビックプライド概念図

4.1. 愛着は日常経験に根ざす

4 名の語りを比較すると、函館が観光都市であることや高い外部評価は誇り (LP) の形成に部分的に影響する一方、〈地域愛着〉は観光資源としての評価よりも、日々の生活における景観や歴史、気候、地形といった常にそこにある当たり前の日常に根ざしていた。A さんは「空気がいい」といった生活感覚を通じて、B さんは世代を超えた居住経験による帰属意識として、C さんは地域内の人間関係を通じて、D さんは他地域との比較の末に自ら選んだ場所として、それぞれ愛着を語った。これは、街の雰囲気や感覚を通じてひとまとまりに受け取られるという北 (2018) の指摘や、具体的な場所経験の蓄積が場所アイデンティティの基盤となるという O'Sullivan ら (2023) の知見と整合的であり、シビックプライドの根幹に身体的・感覚的な場所への愛着が存在することを示している。

4.2. 誇りは外部評価から立ち上がる

一方、誇りの語られ方は愛着と異なり、外部評価や他地域との比較に触れたときに住民が価値として意識するという傾向が確認された。A さんは函館山の夜景を「奇跡といわれている」と誇らしく語ったが、それは観光資源の誇示ではなく、外部から評価されていることを間接的に受け入れる姿勢であった。D さんの地元否

定言説への擁護も、自ら比較し選び取った場所だからこそ適切に評価されてほしいという態度として現れており、誇りは外部の評価との関係の中で相対的に形成される性質を持つことが示唆される。

4.3. 課題と不安は改善志向を介して参画を駆動する

Bさんは、観光混雑を受けた急速な環境変化に、高齢化や担い手不足といった要素を重ね合わせながら、地域が今後も持続可能であるのかという問いを抱いていた。

重要なのは、これらの課題や不安が既存の4要素と切り離されて存在するのではなく、相互に結びついていた点である。第一に、愛着との関係では、Dさんの「もったいない」という表現に象徴されるように、函館に愛着があるからこそ、現状が十分に活かされていないことへの改善の余地を含んだ課題認識が生まれていた。第二に、参画との関係では、Dさんは課題認識をSNSやカフェを通じた情報発信の実践に還元し、Bさんも「このままではいけない」という危機意識を地域運営への関与につなげようとしており、同時に活動を通じて新たな課題に気づくという往還もみられた。第三に、アイデンティティとの関係では、混雑やマナー問題が「観光都市であるからこそ課題」「函館ならではの課題」として認識されており、課題自体が地域アイデンティティの一部に組み込まれていた。

他方、Cさんは函館への好意を保ちながらも、雇用機会の不足や同世代の流出により「自分は将来的にここに残らないだろう」という距離感を語り、愛着と葛藤が併存していた。この比較から、課題認識はそれ自体がシビックプライドを弱める要因ではなく、課題が自身の活動によって「改善可能なもの」と意味づけられるか、「自分ではどうにもならないもの」と認知されるかによって、参画を促す場合と、地域から距離を取る方向に働く場合とに分かれることが示唆される。

5. おわりに

観光都市函館におけるシビックプライドは、次の3つの特徴を持つことが示唆された。第一に、その根幹には、観光都市としての外部評価や地域ブランド像ではなく、日常生活の経験に根ざした身体的・感覚的な場所への愛着が存在する。第二に、誇りは観光資源から直接生じるのではなく、日常に根ざした愛着や地域理

解を土台に、外部からの評価との関係の中で間接的・相対的に立ち上がる。第三に、地域課題への批判的認識や将来への不安は、自身が関与し得る「改善可能なもの」と意味づけられ改善志向を伴うことで、参画を駆動するシビックプライドの構成要素へと昇華されていた。住民は、観光ブランドとしての函館と距離を保ちながらも、生活の場としての函館への愛着を基盤に、課題や不安に関与へのエネルギーに転換していた。従来のシビックプライド研究が主に肯定的な感情の束としてシビックプライドを捉えてきたのに対し、本研究は課題意識や不安をも含んだ地域への真摯な向き合い方としてシビックプライドを再定義する必要性を示した。

限界として、対象者は4名であり属性による差異の検討は不十分である。また一時点の横断的分析であり、感情の時間的変容は捉えられていない。今後は多様な住民層や他の観光都市との比較を通じて、観光とシビックプライドの関係における共通性と地域固有性を検討する必要がある。

文献

- 函館新聞デジタル (2018). 中核市幸福度、函館は42位「教育」上位も「健康」最下位
<https://digital.hakoshin.jp/news/national/35302>
- 伊藤 香織 (2017). 都市環境はいかにシビックプライドを高めるか：今治市を事例とした実証分析 都市計画論文集, 52(3), 1268–1275.
- 株式会社ブランド総合研究所 (2024). 地域ブランド調査 2024
<https://news.tiiki.jp/articles/4908>
- 川喜田 二郎 (1967). 発想法：創造性開発のために 中央公論社
- 北 雄介 (2018). オノマトペを用いた街歩きによる都市の様相の記述と分析 日本建築学会計画系論文集, 83(749), 1285–1295.
- O'Sullivan, K. F., Hale, R., Pidgeon, N., Henwood, K., & Shirani, F. (2023). Identity, place narrative and biophilic urban development: Connecting the past, present and future for sustainable liveable cities. *Frontiers in Sustainable Cities*, 5, 1139029. <https://doi.org/10.3389/frsc.2023.1139029>

付記

本研究は 第1著者の公立はこだて未来大学での卒業研究に基づいている。